

酒 谷 城

15世紀中頃、酒谷は野辺盛仁の当知行分として「飢肥酒谷之城一円」とみえるのが初見。文明16年12月、「北郷久氏が酒谷城を堅く守る」（文明記）。天文15年には飢肥番となった北郷時久が入城（三代日帳）。永禄5年5月には飢肥全域が伊東領となり、酒谷城も伊東方が格護したが、同9月18日には島津方が奪還した（日向記・三代日帳）。永禄7年、伊東衆が侵略し（三代日帳）、同11年2月、飢肥城への兵糧を荷籠めしようとする北郷勢が北郷図書助城番の酒谷城に入り、同6月には飢肥が再度伊東領となり、酒谷城には長倉淡路守が入った（日向記）。伊東四十八塁の一つとなったが、天正5年の伊東氏の日向退出により島津領に復したが、同15年の秀吉の国分けにより再度伊東氏領となり、河崎権助、長倉三郎兵衛尉らが地頭となり入城した（日向記）。元和の令で廃城となったとされる。

城地は、酒谷川が溪谷を抜け出た場所で飢肥院の荘内と連絡できる要道上にあり、飢肥～都城の繫城となる一方、飢肥の当知行を目指した伊東氏にとっては、領国を維持するための境目の城となった。

酒谷川右岸の標高108.5mの最大幅100m総長550mのシラス台地にあり、急崖を障壁に利用して、幅20～30mの空堀を縦横に大胆に入れて6つの郭を造り出し、個々の郭内は、堀や段差によって細かく区割りされたものが多い。中央で南北に横断する堀によって、中央広場を共有する曲輪1・曲輪2・曲輪3の西群、東西堀底道を共有する曲輪3・曲輪4・曲輪5の東群に大別できる。

西群は広場に向かって土塁や腰曲輪を備え、曲輪縁が曲線的である。標高108.5mの曲輪1は城内の最高所で坂虎口は2か所で鉤型となり、東端と西端にはしっかりした土塁が付く。東群は曲輪面を2～3区に細分し、曲輪縁が前者より直線的という特徴がある。

虎口は、東西の各群に1ヶ所ずつ想定できる。西群にある虎口は、前面に高さ1mの土塁をもった外柵形状の虎口で、ここを進むと曲輪1と曲輪2に挟まれた35m×25mの広場となる。広場北側の堀口を土塁で塞ぐ。

村田は、曲輪1の西側にあり堀切で遮断されている曲輪6を城外とする。曲輪6の西端には宝きょう印塔2基、五輪塔1基があるが、周辺の斜面は比較的緩やかな地形となっている。

村田修三は、酒谷城跡を1と2-1・2-2、3～5の3群とし分散しまとまりがないとし、こうしたぶつ切り型の台地城を「南九州型」と呼び、「志布志城によく似た地形であるが、伊作城のように中央に縦割りの堀を入れてある。山上は空堀で七区画に分かれ、段差を加えて分けると十一の曲輪になる」とし、最も地形が高い1が主郭になるべきだが余りにも粗放とし、虎口の工夫から5-1区を最も出来がよく主郭の曲輪と評価した。〔村田修三「城の分布」『中世城郭事典』第3巻 新人物往来社 1987〕

木島孝之は、「各曲輪は巨大な空堀によって隔絶し、堀底から各々の曲輪へ入る構造」で、村田と同様に曲輪5-1を主郭とし、織豊系の縄張り技術による改修痕跡がないとする。

〔木島『城郭の縄張り構造と大名権力』九州大学出版会 2001〕

